

# 英語辞書の発音表記を評価するための枠組み

Wells の「標準語彙セット」を拡張する

牧野武彦

## 発表者略歴

1965年京都市生まれ

1989年東京外国語大学英米語学科卒業、1991年同大学院外国語学研究科修了

1987～88年米国 Kansas 大学に留学

現在、共立女子短期大学専任講師

専攻：英語音声学

関係辞書：『新英和中辞典』第6版（研究社、1994）[調査・校正協力]

『カレッジライトハウス英和辞典』（研究社、1995）[執筆]

『ライトハウス英和辞典』第3版（研究社、1996）[執筆]

## はじめに

英和辞書の編集において、発音表記の執筆は一種の“特殊技能”と見なされていると思われる。少なくとも私の関係する辞書ではそうである。また、“現場の教師の抵抗”による売り上げへの影響に対する懸念と、“特殊技能”視による担当者難も手伝ってか、英和辞書の発音表記の改善が一部を除いてなかなか進まない。

辞書における発音表記を取り扱うのに、英語音声学の専門的知識が役に立つことは確かである。しかし、英和辞典に関する限り、実際の執筆作業の大部分は、様々な資料に記載されている発音表記をその辞書で採用している表記体系に“変換”することである。これはマニュアルさえしっかりしていれば機械的にできる作業であり、それほど高度な知識・技能を要するわけではない。

しかしながら、現状では発音表記の技能は英語音声学を専門的に学んだ者が実際の経験を通して修得して行くという部分が大きく、マニュアルが十分に整備されているとは言い難い。本発表の目的は、そのようなマニュアルを構築するための基礎となる枠組みを提示することである。

これにより、実際の辞書編集において発音執筆を担当できる人材をより広く求めることが可能になるであろう。更に、この枠組みが幅広く流布すれば、“見なれない”発音表記の読み取りと評価が現場の教師にとって容易になるはずである。発音表記の改善と、それによる発音教育への波及効果も狙っている。

なお、本発表は牧野 (1995, 1996a, 1997) を基礎資料として用いているが、枠組み自体は多少改変している。

## 英和辞典における発音表記の複雑さ

英和辞典では、アメリカの標準的な発音 (General American > GA 一般米語) とイギリスの標準的な発音 (Received Pronunciation > RP 容認発音) の両方を、なるべくスペースの消費を抑えて記載することが求められている。GAとRPは同じ子音音素目録を持つため、子音についてはこれでほとんど問題は起こらないが、母音については目録が異なる上にその語彙的な分布に食い違いがあり、このため両方を記載しようとするとある程度込み入った表記法にならざるを得ない。発音表記が複雑に感じられる理由の大部分は、このGAのRPの母音体系の食い違いについての知識が十分に普及していないことであると考えられる。

## Wells (1982) の「標準語彙セット」

私の知る限り、GAとRPの母音音素の食い違いの様相を最も明確にまとめているのは Wells (1982: 122-123) の「標準語彙セット (standard lexical sets)」である。これは、GAとRPにおいて同じ振る舞いをする語をキーワードで代表させたものである。以下に、GAとRPにおける表記を含めてそれを紹介する：

キーワード	GA	RP	キーワード	GA	RP
1. KIT	ɪ	ɪ	13. THOUGHT	ɔ	ɔː
2. DRESS	ɛ	e	14. GOAT	o	əʊ
3. TRAP	æ	æ	15. GOOSE	u	uː
4. LOT	ɑ	ɒ	16. PRICE	aɪ	aɪ
5. STRUT	ʌ	ʌ	17. CHOICE	ɔɪ	ɔɪ
6. FOOT	ʊ	ʊ	18. MOUTH	aʊ	aʊ
7. BATH	æ	ɑː	19. NEAR	ɪr	ɪə
8. CLOTH	ɔ	ɒ	20. SQUARE	ɛr	ɛə
9. NURSE	ɜr	ɜː	21. START	ɑr	ɑː
10. FLEECE	i	iː	22. NORTH	ɔr	ɔː
11. FACE	eɪ	eɪ	23. FORCE	ɔr	ɔː
12. PALM	ɑ	ɑː	24. CURE	ʊr	ʊə

以上は、強勢のあるところでのみ現れる「強母音」だけに対応している。弱母音に関しては「標準語彙セット」には含まれていないが、次のものをキーワードとする語群

が挙げられている (Wells 1982: 165-168) :

キーワード	GA	RP
w1. happY	i	ɪ
w2. lettER	əɹ	ə
w3. commA	ə	ə

これにより、辞書の発音表記の評価が容易になったのは確かである。しかし、牧野 (1995, 1996a, 1997) および Akasu, et al. (1995) における調査の結果、辞書で現実に用いられている表記に対応するには、この「標準語彙セット」を修正・拡充する必要があることが分かった。辞書においては同じ音素に属していると考えられるものに対しても利用者の便宜のために異なる記号を用いたりすることがあるからである。

なお、上で用いられている音素表記は、GAとRPそれぞれの中での当該音素の位置づけを基準に記号が選択されているので、同じ語彙セットに対して同じ記号が用いられているか異なる記号が用いられているかということは、両者の発音が同じであるか違うのかということとは必ずしも対応しないことに注意しなければならない。たとえば、CLOTH は異なる記号を用いてはいるものの実際の音質は非常に近く、逆に THOUGHT は長音符号を除けば同じ記号だが実際の音質はかなり異なる。

## 本発表における「拡張標準語彙セット」

それでは、辞書の発音表記を評価するための「拡張標準語彙セット (expanded standard lexical sets)」を以下に挙げる :

キーワード	GA	RP	キーワード	GA	RP
1. KIT	ɪ	ɪ	13. CAUSE	ɔː	oː
2. GET	ɛ	ɛ	14. GOAT	oʊ	əʊ
3. CAT	æ	æ	15. GOOSE	uː	uː
4. HOT	ɑ	ɒ	16. RICE	aɪ	aɪ
5. CUT	ʌ	ʌ	17. NOISE	ɔɪ	ɔɪ
6. FOOT	ʊ	ʊ	18. LOUD	aʊ	aʊ
7. ASK	æ	ɑː	19. NEAR	ɪə̯	ɪə
8. SOFT	ɒː	ɒ	20. CARE	ɛə̯	ɛə
9. BIRD	əː	əː	21. PART	ɑə̯	ɑː
10. NEAT	iː	iː	22. HORSE	ɔə̯	oː
11. FACE	eɪ	eɪ	23. HOARSE	oə̯	oː
12. SPA	ɑː	ɑː	24. CURE	ʊə̯	ʊə
			25. idEA	iːə̯	ɪə

キーワード	GA	RP	キーワード	GA	RP
r1. sERious	ɪr	ɪər	w1. happY	i	i
r2. spIRit	ɪr	ɪr	w2. lettER	ə	ə
r3. vARy	ɛr	ɛər	w3. commA	ə	ə
r4. fERRy	ɛr	ɛr	w4. habIt	ɪ	ɪ
r5. mARRy	ɛr	æɪr	w5. usUal	u	u
r6. fOReign	ɔːr	ɔːr	w6. regUlar	ʊ	ʊ
r7. jURy	ʊr	ʊər			

記号は英米で同じと見なせるものはなるべく揃えるようにした。キーワードは、なるべく短くて馴染みやすいものに入れ替えた。なお連番はここでは Wells の「標準語彙セット」と比較しやすくするために揃えたが、語群が分割されているものもあるので、内容は必ずしも同じではない。

新たに加わった語群は 25、r1～7、w4～6である。25の idEA は Wells (1982: 155) では NEAR の下位区分となっているが、RPとGAとの対応関係が異なっており、辞書でもそのように区別して表記されているという実情に合わせて独立させた。

r1～7 は母音間の r の直前にある母音の表記の仕方を確認するための語群である。これらは、英和辞典ではそれほどの多様性はないが、英英辞典ではGAの方の表記が、恐らくは何を標準的と見るかの相違のために、辞書により様々に異なっている。ここで行なった表記は一例に過ぎない。

弱母音には新たに w4～6を設けた。このうち w4 の habIt は、イギリス流の音素分析で強音節にも弱音節にも現れるとされている /ɪ/ を KIT から独立させたものである。弱母音は語彙的な分布に変動があることが多く、habIt は w3 の commA との変異がよく見られる。w5 の usUal は Wells (1982) における位置づけがはっきりしないが、現実には /u/ と表記している辞書 (Wells 自身の LPD も含む) があり、これは FOOT とも GOOSE とも異なるので独立させてある。w6 の regUlar は一部の辞書で /ʊ/ (の類の記号) を用いて commA とは区別して表記されているために、やはり独立させた。

## ケーススタディ

では、「拡張標準語彙セット」を用いて、いくつかの新刊辞書の発音表記体系の特徴を (一部ではあるが) 述べてみる。

### (1) 『プログレッシブ英和中辞典』第3版

- KIT, FOOT, habIt は相変わらず /i, u, ɪ/ で、NEAT, GOOSE, happY との音質の違いが示されていない。

- BIRD, NEAR, CARE, PART, HORSE, HOARSE, CURE, lettER は旧版と変わらず /əɪr, iəɪ, εəɪ, αɪr, ɔɪr, ɔɪr, uəɪ, əɪr/ で、米音と英音の読み取り方が複雑になっている。
- sERious, vARy, jURy がそれぞれ [i(:)r, ε(:)r, u(:)r] だったのが、『ジーニアス』等と同じ /iɔr, εɔr, uɔr/ に変わった。
- fOReign は /ɔɪr, ɔr | ɔr/ と表記。idEA は旧版の [i(:)ə] から、米音・英音の読み取りが現地解決的にできる /i:ə | iə/ に改善された。
- regUlar は commA と同じ /ə/ で表記。

( 2 ) *Longman Dictionary of American English*, 2nd edn. ( GAのみの表記 )

- NEAT, FACE, GOAT, GOOSE, happY, usUal が旧版の /iʲ, eʲ, oʷ, uʷ, iʲ, uʷ/ から /i, eɪ, oʊ, u, i, u/ に変わった。煩雑な上付き記号を廃したことにより読みやすさが増した。happY と usUal については、存在の怪しい出わたりを表記しなくなったことにより正確さが増した。
- BIRD, lettER が旧版の /ɜr, ər/ から /əɪ/ に変わり、二重母音であるという誤解を招く心配がなくなった。(両者の区別は強勢符号によってつけている。)
- NEAR, CARE, CURE が /Iər, εər, ʊər/ から /Ir, ɛr, ʊr/ に変わった。
- 学習的には不要な horse と hoarse の区別をやめて /ɔr/ に統一した。

( 3 ) *Random House Webster's Dictionary of American English* ( GAのみの表記 )

- NEAT, FACE, GOAT, GOOSE, RICE, NOISE, LOUD, happY, usUal がそれぞれ /iy, ey, ow, uw, ay, oy, aw, iy, uw/. happY と usUal では出わたりの表記の必要性は疑問。
- BIRD, lettER は LDAE 旧版と同じ /ɜr, ər/ という表記で、二重母音であると誤解する恐れあり。NEAR, CARE, CURE も /Iər, εər, ʊər/ で、LDAE の旧版と同じ。
- GAを表記しているはずなのに、HOT が /ɒ/ となっている。Ladefoged (1993: 76) の表のミスを受け継いだものかも知れない。

( 4 ) *NTC's American English Learner's Dictionary* ( GAのみの表記 )

- NEAT, FACE, GOAT, GOOSE がそれぞれ /i, e, o, u/ で、単母音の範囲が広い。
- BIRD, lettER は /əɪ/、NEAR, CARE, CURE はそれぞれ /Ir, ɛr, ʊr/ と、LDAE<sup>2</sup> と同じだが、ミスが目立ち、CARE に関しては /er, eə, εə/ などの表記も見られる。
- HORSE, HOARSE は区別せず、どちらも /or/ を用いる。
- RISE, NOISE, LOUD は /aɪ, oɪ, aʊ/ と、第一要素の記号の選択が独特。
- ( 1 ) ~ ( 3 ) の辞書ではいずれも mARRy は /æɪr/ で、vARy, fERRy と区別されていたが、この辞書では区別せずに /ɛr/ としている。

( 5 ) *The New Oxford Dictionary of English* ( RPのみの表記 )

- Roach (1991)、LPD、EPD<sup>15</sup>などで慣用的に用いられている記号から敢えて離れている部分がある。CARE /ɛː/, CAT /a/, RICE /aɪ/, BIRD /ɜː/。
- happY が語末では /i/、母音の前では /ɪ/ となっている。
- New SOED、COD 最新版などで既に採用されている表記法であり、今後のOxford 辞書の主流となるのかどうか注目される。

参照辞書

『カレッジライトハウス英和辞典』( 研究社, 1995 )

『ジーニアス英和辞典』改訂版( 大修館書店, 1994 )

『新英和中辞典』第6版( 研究社, 1994 )

『プログレッシブ英和中辞典』第3版( 小学館, 1998 )

*English Pronouncing Dictionary*, 15th edn. (Cambridge University Press, 1997) [EPD<sup>15</sup>]

*Longman Dictionary of American English*, New edn. (Longman, 1997) [LDAE<sup>2</sup>]

*Longman Pronunciation Dictionary* (Longman, 1990) [LPD]

*New Oxford Dictionary of English, The* (Clarendon Press, 1998)

*NTC's American English Learner's Dictionary* (NTC, 1998)

*Random House Webster's Dictionary of American English* (Random House, 1997)

参考文献

Akasu, K., T. Koshiishi, R. Matsumoto, T. Makino, Y. Asada and K. Nakao. 1996. An analysis of *Cambridge International Dictionary of English*. *LEXICON* 26: 3-76.

Cruttenden, Alan. 1997(1998). Review: Jones, ed. Roach & Hartman: *English Pronouncing Dictionary* and Wells: *Longman Pronunciation Dictionary*. *Journal of the International Phonetic Association* 27: 81-86.

岩崎研究会( 編 ) 1981. 『英語辞書の比較と分析』第1集・第2集. 東京: 研究社.

岩崎研究会( 編 ) 1989. 『英語辞書の比較と分析』第3集・第4集. 東京: 研究社.

Ladefoged, Peter. 1993. *A Course in Phonetics*. 3rd edn. Fort Worth: Harcourt Brace Jovanovich.

牧野武彦. 1995, 1996a, 1997. 「英語発音表記の類型論(1)~(3)」『共立女子短期大学文科紀要』38: 69-78; 39: 57-72; 40: 13-31.

牧野武彦. 1996b. 「英語辞書の発音表記」音韻論研究会( 編 ) 『音韻研究 - 理論と実践』pp.159-162. 東京: 開拓社.

Roach, Peter. 1991. *English Phonetics and Phonology: A Practical Course*. 2nd edn. Cambridge: Cambridge University Press.

Takebayashi, Shigeru. 1998. LPD and EPD15: A Comparative Review. *International Journal of Lexicography* 11.2: 125-136.

Wells, John C. 1982. *Accents of English*. Cambridge: Cambridge University Press.